

語られない韓国

— 高浜虚子の小説『朝鮮』

劉^ユ
銀^ウ晃^{キョウ}

はじめに

高浜虚子が初めて韓国^①を訪問したのは一九二二年（明治四十四年）四月のことで、それから二ヶ月後の六月には『東京日日新聞』と『大阪毎日新聞』に『朝鮮』の連載が始まる。日韓併合から約一年後であり、夏目漱石の「満韓ところぐ」の連載から約二年後である。俳人として知られていた虚子が小説というジャンルを選んで『朝鮮』^②を書いたのは、正岡子規などが唱えていたいわゆる「写生」を小説というジャンルで試みていたからであろう。俳句の表現方法として提起されたのが「写生」であり、小説で重視していた「筋」を中心に物語を展開するには「写生的な書き方は適切な方法ではないかもしれない。あえて小説に向かない方法をとって『朝鮮』を書くとした虚子の意図、及び初出である新聞連載から単行本への移行過程で大幅に修正された理由などを踏まえ、小説『朝鮮』で「朝鮮」が積極的に語られなかった理由を探りたいと思う。

一、『朝鮮』という小説

『朝鮮』は「余」と「妻」^③が下関を出発し、釜山、大邱、京城、平壤の順に韓国を旅する紀行文的小説である。しかし、単純に韓国で見聞したことや感じたものをただ書いたのではない。釜山に着いた他の日本人たちが、概ね朝

鮮人の外見で騒いでいる時、余と妻は彼らとは少し違う視線で朝鮮人を見ている。

愈々船が釜山に着いた時、余は妻と共に甲板に出て見て驚いた。棧橋を見下ろすと其處をぞろ／＼と歩いてゐる背の高い白衣の人は皆朝鮮人であつた。

「あれが朝鮮人だよ。」といふと青い顔をした妻は唯、

「まあ。」と言つて眺めてゐた。

「二人一人皆煙管を啣へてゐるね。」とか「皆小相撲のやうな頭をしてゐやあがる。」とか我等の傍の人は話し合つて笑つてゐた。

彼等は背中に木曾の山人が背負つてゐるやうなものを背負つて其に荷物を乗せて運んでゐた。（『朝鮮』二^④）

朝鮮に朝鮮人がいることは当然のことであるが、余と妻は彼らを見てただ驚く。他の日本人が朝鮮人の外見で面白がつている時、二人は朝鮮人がそこにいること自体に驚いている。間接的に得た知識としての対象を直接見た時、人は何よりそれが存在していることに驚くのではないだろうか。「朝鮮人は煙管を皆吸っている」などのステレオタイプ的な描写は実物を見ていない人でもできる。しかし、新聞などの媒体だけで接していたその対象が目の前で動いていると実感した時は逆に大げさな描写ができなくなるのではないだろうか。だから「木曾の山人が背負つてゐるやうなものを背負つて」のように朝鮮人労働者の姿を描写することで留まっているのだらう。ここで窺えるのが余が持っている朝鮮に対する二つの視線である。新聞や書籍などの媒体だけで接する「間接的な視線」と、朝鮮へ入り自分の目で見る「直接的な視線」である。

朝鮮人の勞働者らしいものは此處にも盛に出這入りして居た。其の多くは子供であつた。或一人の子供の朝鮮人は重い荷物を背負つて這入つて來た。額から流れる汗を彼は其汚れた白い袖で無造作に拭いて其荷物を腰掛の上に下ろした。其處には夫婦連の商賣人らしい日本人が腰を掛けてゐた。男は財布から五錢銅貨を出して與へた。朝鮮人の子供は其では規定の賃銀に足り無いといふやうな顔付きをして五錢銅貨を載せられた手を突出した儘で引込めやうとしなかつた。商賣人は其手を拂ひ避けるやうにして、「あつちへ行け。」と言つた。

(中略)

其時男は墓口を開けて見せてさつき遣つた五錢銅貨のほか、十錢銀貨ももう他の白銅も無いといふ事を知らせて又手を振つた。同胞人のこの賤しむべき舉動を余は自分の事のやうに耻かしく感じた。

(『朝鮮』一二)

右の引用で余が見た朝鮮人労働者は大体子供であつた。子供が労働者であることは意外なこともかもしれないがそれよりも、余にはその子供に対して卑怯な態度をとる日本人の姿がもつと印象深く残つた。だから子供の様子よりも商賣人らしい日本人の様子がより印象的に描かれたのである。余が初めて旅する朝鮮で印象的だったのが朝鮮の風景や朝鮮人の様子より、貧しそうな朝鮮人労働者の子供に対して正当な労働の対価を払おうとしない卑怯な日本人像であつた。余と妻が旅する朝鮮は日本の植民地ではあるが、小説の發端に当たる釜山での描写では、植民地であることが強くは表れていない。このような書き方は当時の朝鮮に関する他の記述^⑤と比べると斬新なものかもしれない。言うまでもなく余と妻が旅する朝鮮は日本の植民地である。しかし、小説の發端に当たる釜山での描写は、それについて直接には触れていない。釜山から大邱へ、それから京城へと余と妻が北の方へ移動すると共に、徐々に朝鮮が植民地である認識が鮮明に表現される。次に引用するのは、その最初が大邱で会つた妻の叔父家族に対す

る説明の箇所である。

妻は此一家族の詳しい話を今迄餘りしなかつた。(中略)突然朝鮮から長い手紙が來た。其は叔母からであつた。其中には爲替も這入つてゐた。叔父は親類にも斷はらずに従妹を抱て朝鮮に行つた。親類と叔父との間には其以來音信が絶えてしまつて一時は生死すら判らなかつた。其の時分の朝鮮は遠い隔つた國であつた。

〔朝鮮〕(三)

叔父は日清戦争の時はすでに朝鮮へ渡つており音信不通になつてゐた。その時の朝鮮が「遠い隔つた國」であつたと認識していることは、現在はその時とは違つて遠い國ではないという認識があることを表す。朝鮮が日本の領土になり、地方にでも行くような感覚で行けるように近くなつてゐるからこそ音信不通だつた叔父家族とも会うことができたともいえるだろう。朝鮮が近い國であるという認識は小説の初めにも表れてゐる。

「この人達は皆釜山に渡るのでせうか。」と其處に雜沓してゐる多くの人を指して聞いた。

「無論さうだらう。この一室は皆關釜連絡船に乗る乗客許りだもの。」

「でも、あの大勢の家族連が飯櫃を紐でからげたのを持つて居つたり、一人旅らしい女が子供を背にくゝりつけたりしてゐるのを見ると何だかすぐ御近處にでも行くやうですわね。」

「さうさなあ、けれども其の無造作なやうなところに淋しい慌だしい心持があつて、本土を離れる人といふやうな感じが強いぢや無いか。」

〔朝鮮〕(一)

ここは余と妻が日本を離れる前の下関で会話する場面で、「御近處にでも行くやう」な日本人の姿が表現されている。しかし、本土を離れるという「淋しい慌だしい心持」も表れている。日本の地方のようだが、また違う国でもある朝鮮に対する認識が窺える部分である。朝鮮に行く前までは朝鮮は日本の地方でもあり、違う国でもある空想の中の場所であったことが分かる。それが、朝鮮を直接経験することによって変わっていく。

内地での失敗者が殖民地に渡つて來て成功するのはまだ内地人の多く渡つて來ない間の事である。一旦内地の有力者が踵を接して來やうになると彼等は往々にして又劣敗者となるのである。言は彼等は殖民地開拓の先驅に使う、に過ぎぬのである。察する所叔父の一家も此例に洩れぬらしい。彼は遂に生活程度の方外に向上する釜山に住ひ兼ねて其店は他のものに譲つて近く此大邱に移住したのであつた。けれども内地人大移住の流れは今日此の大邱にも推し寄せて來てゐる。釜山を見棄て、大邱に移つた一家はやがて又遠からず北の方へ移つて行くべき運命を持てゐるかの如く考へられた。

（『朝鮮』三）

叔父家族と接することによって少しずつ殖民地である朝鮮が浮かび上がる。それは日本で思つていたように開拓できる新天地ではなく、日本人であつても開拓に利用されるようなところであつた。内地での失敗者が滿洲や朝鮮へと渡ろうとするのは明治期に書かれた他の作品からも見る事ができる。夏目漱石の『門』でも主人公宗助の弟小六の学費問題が起こり、どうしようもできないと思つた時、「朝鮮か滿洲か」でも行こうかという言葉を出す。『門』の時代は日韓併合の約一年前ではあるが、それから『朝鮮』が書かれたのが約二年後であることを考えれば大きな時間差はないだろう。実際にその植民地に行つてみると日本で思つたように失敗者に新しい機会を与える

ような新天地ではなく日本人でも新しい開拓のために北へ北へ^⑥と移らなければならない状況になっていた。その事実を認識してからは「余」にも朝鮮が次第に植民地として見えてくる。日本の植民地になった朝鮮という空間に対して、朝鮮での経験なしに空想的に思う植民地朝鮮は実際に足を踏み入れた現実の朝鮮とは違うのである。『余』が釜山で初めて感じた朝鮮は空想として頭に描いていた朝鮮ではなく、人々が暮している「現実の朝鮮」であり、その朝鮮は植民地であらうがなからうが、朝鮮の人々が日常の生活を営んでいる現実の土地であったのだ。しかし、「余」の目には朝鮮人が暮らしている様子は映らない。これは虚子が見過^⑦しているもう一つの朝鮮である。虚子は前述したように直接的な視線は持つことができたが、朝鮮を見る三つ目の視線である「朝鮮人の立場で見る朝鮮」を見過^⑧してしまったことは高崎隆治^⑦や権升赫^⑧らによるポストコロニアル的な批判を呼び起こす原因にもなる。

内地でまだ見る事の出来ぬ廣軌式の大きな汽車が——これも殖民地的ともいふのであらうか、全く實用一方な殆ど裝飾の無い、例へば前立も鍔も無い、唯長大な鐵の甲でも見るやうな感じのする汽車が——大きな動搖を爲しつ、北へくと進みつ、ある事を面白く思つた。さうして迅速に大膽に此鐵路を拓いた戦争前後の日本人の力を思つた。

（『朝鮮』四）

夏目漱石の「滿韓ところど」^⑨では「日本人の力」とはまさに南滿州鐵道株式会社であつたが「余」にとっては、北へ向う實用一方の大きなこの「汽車」^⑩こそが「殖民地的」という言葉にあるように植民地の象徴であり、日本人の力でもあると感じたと推測できる^⑪。「余」の目に映つた植民地朝鮮は叔父家族に代表される日本人の姿と日本が伝えた文明の象徴でもある「汽車」に表象化され、具体化するのである。その過程で空想的な空間であつた朝鮮は

実体的なものとなる。そのためには写生的な視線と小説というジャンルが両方必要であったと思われる。虚構の登場人物の目に映る朝鮮を写生的な視点で描くことによって実在する朝鮮を語ることができたのではないだろうか。なお、写生文については後述する。

二. 新聞連載から単行本への変化

『朝鮮』を書いていた頃の虚子は小説への意欲に満ちていた。しかし、順調に進んでいた新聞連載は上篇までで、八月二十七日に上篇が終わると同時に『大阪毎日新聞』での連載は打ち切れ、『東京日日新聞』だけになる。それも毎日のように連載していたのが何日間も休載し、八月二十九日始まった下篇が十一月二十五日に終わる。内容としては上篇が釜山から大邱、京城まで、下篇は平壤での話で、上篇では人との出会いや彼らとの関わり方が主に語られるが、下篇では有名な景勝地を見物する場面が中心になる。それから翌年二月には単行本としても出版される。しかし、新聞連載分と単行本を比べてみると単行本の方が多く修正されている。その違いを分析すれば虚子が『朝鮮』で何を書こうとしたのがより明確になるだろう。

新聞と単行本で最も違う部分は余と妻に関する部分と、余の友人である石橋剛三に関する描写である。

唯一人の子を亡くした余と妻とは遂に朝鮮に渡航することに極めた（中略）讀者に斷つて置くが、余等は父祖から傳へた多少の財産がある。余が流行に見棄てられた文學者としてまだ相當の生活が遺れてゐるのは此の遺産のお陰である。

（『東京日日新聞』一九一一年六月十九日（二））

余等夫婦が下關の停車場で下り立つたのは上弦の月がもの淋しく雲間を出たり這入つたりして生暖かい風の吹いてゐる一夜であつた。

〔朝鮮〕一

朝鮮行きを決めた理由が初出の新聞では詳しく説明されているのに比べて単行本では夫婦が下関を出発する場面から始まり、二人が朝鮮行きを決心した理由は暗示的にしか書かれていない。現状を説明してから物語がはじまる新聞より「唯一人の子を亡くし」「相當の生活が遺れてゐる」二人の夫婦が日本を離れるという寂しい場面の描写から始まる単行本の方がプロットの面では小説らしいと言えるだろう。

余は試に、

「石橋―」と呼んで見たが返辭をしなかつた。彼の大きな呼吸は布袋腹の上に落着いた波を作つてゐた。彼は禪家が入定したやうに彼が全精神を一所に集中して沈思三昧に入つてゐるものゝ如く想像された。

〔東京日日新聞〕一九一一年七月十四日（二十六）

彼は決して眠つてはゐなかつた。又強て眠を装はうてゐるのでも無かつた。余等の談話は一々彼の耳に這入つてゐるのかも知れず、其とも亦た余等の談話も這入る隙の無い程其の脳中には別のものが充實してゐるのかも知れなかつた。

〔東京日日新聞〕一九一一年七月十六日（二十八）

右の引用は両方とも新聞の剛三に対する描写だが、単行本ではこの描写がなくなっている。日本にいた時も、朝

鮮に渡っても警察の監視下にあるという剛三の得体の知れない鋭さが窺われる場面である。この描写だけでも密かに何かをしているように思わせるのである。しかし、単行本での剛三はただ同類の浪人たちと時間をつぶしている、一見暢気な人にしか見えない。一方、剛三を通して知り合った朝鮮人の洪元善という人物は次に引用する単行本での描写と新聞の描写の間に大きな差は見られない。

「洪元善君は當年の志士さ。見玉へあの齒は拷問の爲めにすっかり抜き取られてしまったのだ。」と言った。洵に齒はすっかり入齒であつて、其の稍萎びたやうな口許には普通の人に見る事の出来ぬ傷ましい影が漂ふてゐた。

（『朝鮮』八）

剛三は先刻から僅に知つて居る朝鮮語は皆使つてしまつて、何か下卑た事を日本語で言つたが其は妓生には通じ無かつた。

「君通辯して呉れ。」と剛三は洪さんに所望したが洪さんは其を厭とも言はず、落附いた言葉で、例の悲惨な口許を動かし、注意深い目で妓生の顔や余等の顔を等分に見乍ら通辯をした。（中略）其洪さんの口から譯されて出る日本語は何となく眞面目に響いて、余等は笑を待設けてゐ乍ら笑はうとは思はなかつた。之から推すと洪さんに譯されて妓生等の耳に傳はつた朝鮮語も恐く剛三の口から出たものとは大分心持が違つてゐたらうと可笑しかつた。又政治家として雄辯家として私に自ら任ずる洪さんの身に取つて斯る通辯の苦痛は想像に餘りあることであつた。

（『朝鮮』十四）

新聞連載の描写の通りに剛三の性格などが浮かび上がり、読者の印象に残ってしまえばこの小説はまるで剛三と洪元善との間で繰り広げられる日韓の政治ドラマになってしまふのではないだろうか。しかし、虚子が描こうとしたのは政治ドラマではなかった。そのため剛三の印象を稀薄化し、ドラマチックな展開の代りに剛三を背景に置いたのではないだろうか。その一方で洪元善の苦しそうな印象と優しい性格を鮮明に描写し、単行本に残した。それは植民地朝鮮の三つ目の視線である朝鮮人からの視線を、虚子なりに配慮したからではないだろうか。ここで『朝鮮』連載直前の予告を確認してみたい。

朝鮮に在る内地人の活動振りはいかに、朝鮮人の生活はいかに。有名な妓生といふものはどんな暮しをしてゐるか。其寫眞帖の中にはどんなものが挿んであるか伊藤公の寫眞か、安重根の寫眞か、彼女が生地晋州の寫眞か。それとも日本旦那の寫眞か。京城を三十年來の栖として今に尚ほ陰謀の中心人物の如くいはれて居る或外國宣教師はどんな大きな豎甲縁の眼鏡を掛けてどんな恰好の尖つた鼻を有して居るか。……其等に答へて。我新版圖の社會狀態を寫すのが此小説の目的である。

〔朝鮮〕『東京日日新聞』一九二一年六月十八日

小説が連載される前の予告にすでに、二十一回目に登場する「有名な妓生」である「素淡」のことを触れている。そして「素淡」と関連して政治的に敏感になりかねない話題を挙げることによって読者の興味を高めようとしていた。しかし、実際の小説の中で「素淡」に関わる政治的内容は述べられていない。連載当初は政治的な内容を入れるつもりであったが、連載途中に考えが変わり政治的な部分を縮小したのではないだろうか。

予告には触れた政治的内容が小説本編でなくなったのはこれ以外にもある。「陰謀の中心人物」「外國宣教師」に関

する記述である。この部分に関しては新聞連載でも単行本でも触れていない。ただ、『朝鮮』の新聞連載末期と重なる時期に『ホトトギス』に載せられた「スケッチ四題」の「陰謀の中心人物」¹²が『朝鮮』の予告で言及された「宣教師」であることが推測できる。この宣教師の「陰謀」的な姿は「剛三」とも重なり、「剛三」の印象が薄くなったのと同じように印象深いこの「外國宣教師」も小説『朝鮮』では消えてしまったのではないだろうか。小説では登場させることが出来なかったがあまりにも印象深い人物であるために散文として『ホトトギス』に載せたのであろう。以上のようなことから虚子が新聞連載の『朝鮮』を大幅省略し、単行本にした意図が見えてくる。『朝鮮』という小説の新聞連載を始めた時は、小説というジャンルの「筋」にあたる物語を書くようにしたが、それが自分の考えているものとは違うことに気づき、単行本を出版する際には「筋」を書くのではなく、少し離れた距離から対象を見る「写生」的姿勢に基づいて「朝鮮」を描こうとしたと考えられる。だからこそ「余」と「妻」の過去や政治的な色彩の強い剛三の人物描写を削除したのであろう。

三. 写生文の実験小説としての『朝鮮』

『朝鮮』は、小説でありながら劇的なストーリーの展開がない。三谷憲正¹³は、新聞連載分を「写生文的・小説」、単行本は「小説的・写生文」とし、「伝奇」を語ろうとした新聞連載分から大幅削除された単行本に変わったと述べている。しかし、『朝鮮』は虚構の人物たちが登場し、互いに関係し合いながら物語が展開される。たとえ単行本の内容が新聞連載時より写生文に近づいたとしても、架空の人物が登場し、行動しながら物語を形成しているということは小説として見ることはできないか。しかし、読者の興味を呼び起こすための「筋」が中心になっている他の新聞小説とは違う面を持っているのが『朝鮮』である。この小説の特質として虚子が試みた新しい形式が

「写生」である。

改めて述べるが、「写生」という概念を初めて用いたのは正岡子規であり、「叙事文」（『日本』一九〇〇年一月二十九日）の冒頭で「言葉飾るべからず、誇張を加ふべからず、只ありのまゝ見たるまゝに其事物を模寫するを可とする」とし、「写生」という言葉は使わずに「写生」の姿勢で文を書くことを述べている。「写生」の基本になる「ありのままを描写すること」を記している子規は「写生」という言葉は使わなかったが、『ホトトギス』を通して「ありのまま」の散文を一般に広めようと努めた。その一つが「日記」の形式をとった一般募集であった。「ありのまま」の文章を『ホトトギス』を中心とする子規門下の同人だけではなく、一般人にまで求めたのである。いわば「写生運動」ともいえる活動であった。しかし、子規本人は写生に基づいた注目すべき散文作品は残さず、一九〇二年に世を去る。子規の「写生」的姿勢は俳句を見る目から育ったものかもしれないが、彼が実現しようとしたのは散文での「写生」であり、それが具体化したのが、『ホトトギス』の日記の募集であり、彼の志向を發展させたのが子規の後を付いた虚子や漱石などのような文人であった。子規が最後の力を絞って書き出そうとした小説「我が病」は一回分が出来上がっただけで、彼の死によって未完で終わってしまった。一方、「写生」というより「写実」を実現しようとした子規の姿勢をうけついたのが虚子であった。ここでは改めて虚子の写生文についての言説を見てみよう。

俳句及寫生文を作る情の状態は微温的だ。而して其結果は寫生だ。微温的情緒動いて山川草木から人間の景色に近い動作感情を捕へて句を作る。其捕へる刹那に寫生といふ事が俳句及寫生文を作るもの、鮮明なる旗幟だ。

（高浜虚子「俳句と寫生文（五）」『国民新聞』一九〇六年十月二十八日）

右の引用でも分かるように虚子は、初め写生を俳句や写生文を作るための方法として取っていた。しかし、同じ正岡子規門下であった漱石に影響され小説に熱中し始める。漱石が『吾輩は猫である』を『ホトトギス』に連載し始めたのが一九〇五年であり、虚子が「風流懺法」「斑鳩物語」などの小説を書き始めるのも同じ時期であったことから漱石からの影響があったと推測できる。なお、漱石も写生について述べている。

寫生文家の人事に對する態度は（中略）大人が小供を視るの態度である。兩親が兒童に對するの態度である（中略）寫生文家は泣かずして他の泣くを叙するものである（中略）普通の小説の讀者から云えば物足りない。（中略）寫生文家もこう極端になると全然小説家の主張と相容れなくなる。小説に於て筋は第一要件である。文章に苦心するよりも背景に苦心するよりも趣向に苦心するのが小説家の當然の義務である。従つて巧妙な趣向は傑作たる上に大なる影響を與ふるものと、誰も考へている。所が寫生文家はそんな事を主眼としない。のみならず極端に行くといふ筋を抜いて迄其態度を明かにしやうとする。

（夏目漱石「寫生文」『読売新聞』一九〇七年二月二十日）

漱石のいう「大人が小供を視る態度」、「泣かずして他の泣くを叙する」というのは虚子の「人間の運命をしかく」の思想によつて描くとかいふやうな左様な智的のものではない^⑭と通じるところがある。感情に任せて書くのではなく、虚子の言うとおり「捕へる刹那」を描くのが「写生文」と言っているのだらう。このような「微温的」な姿勢は当時の新聞小説の讀者には「物足りない」と感じたかもしれない。

始め、寫生文が俳句から移つて來たやうに、容易くは人間の研究に手が着け難い。つまり、人間の研究は從來の意味で言ふ寫生以外のものである。詳しく言へば、人間の研究は、鉛筆と手帳とをもつて、街上を歩き廻つて寫し取れるほど、表面的で且つ容易ではない。が然し、今日の寫生文は、漸く一轉化の機運に向つた、この人間研究に一進路を切り開かうとしてゐる。

（高浜虚子「寫生文の由来とその意義」『文章世界』一九〇七年三月）

ここで虚子が、俳句から移つてきた寫生文は人間の研究には向いていないが、今日の寫生文には人間研究に進む一轉化が見えると言つたのはまさに、三谷の言う「寫生文的・小説」への転進とも言えるだろう。

餘裕のある小説と云ふのは、名の示す如く逼らない小説である。「非常」と云ふ字を避けた小説である。不斷着の小説である。（中略）世の中は廣い。廣い世の中に住み方も色々ある。其住み方の色々を随縁臨機に樂しむのも餘裕である。觀察するのも餘裕である。味はうのも餘裕である。此等の餘裕を待つて始めて生ずる事件なり、事件に對する情緒なりは矢張依然として人生である。活潑々地の人生である。描く価値もあるし、讀む価値もある。夏目漱石「虚子著『鶏頭』序」『朝日新聞』一九〇七年十二月二十三日、（春陽堂、一九〇八年一月一日）

虚子が自分の寫生文「叡山詣」¹⁵を小説化した「風流懺法」¹⁶を初めとする短編小説を集めた小説集『鶏頭』に漱石は「序」を書いて、虚子の小説を評価している。漱石がいう「餘裕」こそ客観性につながるもので、だからこそ觀察ができ、味わうこともできるのである。「風流懺法」は、寫生文「叡山詣」をモチーフにし、「余」が「一念」と

いう生意気な少年に出会うことが加わり作られた小説である。虚構の人物「一念」の登場によって「風流懺法」は小説的な色彩を持つことが出来ただろう。「朝鮮」はもう一步進んで「妻」や「石橋剛三」「洪元善」などの虚構の人物が登場し物語が展開される¹⁷⁾。本論では触れなかったが「お筆」という日本人芸者は朝鮮人妓生「素淡」と対照的に描かれ、「余」と「妻」、「余」と「剛三」の間に緊張感を与える役割をする。人間関係がより深まり『朝鮮』は「風流懺法」より小説に近づいたといえよう。しかし、「筋」があまり重要視されなかったため劇的なストーリーがなく、登場人物たちも旅行先で出会って行動を共にするだけの関係に止まる。新聞連載がおわる一四〇回まで人物に活気を与えるためには、もっと徹底した人間研究、もしくはある種の「筋」が必要だったかもしれないが、写生文的小説にこだわりすぎて『朝鮮』では「人間研究」が十分行われず、朝鮮人側から見る目を持つことができなかったのではないだろうか。

おわりに

一九一一年に新聞で連載され翌年単行本で出版された小説『朝鮮』を通して、植民地になったばかりの韓国の姿を、そこに生きている日本人の姿を見ることがができる。当時は新聞でも単行本でも読むことができた『朝鮮』を今は虚子の全集でさえも読むことは出来ない¹⁸⁾。「写生文的小説」をめざして『朝鮮』を書き出した時の虚子は、「余」が文学から遠ざかったこととは正反対に小説に熱中していて、写生を小説で試みようという姿勢も充分であった。しかし、結果として『朝鮮』発表後、虚子は小説から離れることになり、小説としての『朝鮮』も評価されなくなった。だが、『朝鮮』は日韓併合直後の韓国の様子を日本人の視線から描いた唯一の小説である。虚構の人物が登場するが、その人物の目に映った韓国は実在する現実の空間であった。虚子が「直接的な視線」を持っていたのでそ

れを見ることができ、それを表現するために小説でありながらも写生的方法が必要であっただろう。虚子が経験した韓国は日本で漠然と考えていた「間接的な視線」で見る韓国とは違っていて、そこに生きている日本人の姿は惨めともいえるほどのものであった。そのような併合直後の韓国を現実の空間として捉えるために「写生」が必要であっただろう。しかし、写生的な方法にこだわりすぎて、全体としては写生文とも小説とも言えない作品になり、虚子の言う「人間研究」にも力が入らず、そこに生きている朝鮮人の実像が表現できなかった。この意味で小説『朝鮮』では「韓国」は「語られなくなった」といえるであろう。

【注】

①本稿で用いる「韓国」という言葉は現在の「大韓民国」という国の名前ではなく、時代や場所に限らずに朝鮮半島全体を表す抽象的な表現として使う。「朝鮮」を使うときは『朝鮮』原文の引用やその内容に関する部分に限る。

②初出『東京日日新聞』（一九一一年六月十九日～十一月二十五日、上・下篇一四〇回）『大阪毎日新聞』（同年六月十九日～八月二十七日、上篇七〇回）、初刊『朝鮮』（実業日本社之、一九二二年二月）、初刊を底本とする。

③『ポトギス』（一九一一年五月）の「消息」欄に「小生赤木格堂君と共に朝鮮に遊ぶべく本日出発致候。遅くとも五月上旬には帰京の積りに候」とあるように、一九一一年四月に虚子と一緒に韓国へ渡ったのは妻ではなく赤木格堂という子規門下の友人であった。このことから登場人物の「妻」は虚構の人物として登場させた架空の人物である事が分かる。

④単行本の引用は『朝鮮』二のように引用した部分の章を、新聞連載分は『東京日日新聞』明治四十四年六月十九日）のように新聞名と日にちを表記する。（＊引用は原則として引用文献に従ったため改行も原文のまま、適宜表記等を変更した箇所がある）

⑤『胡砂吹く風』（今古堂「ほか」、前編一九九二年十二月、後編一九九三年一月）では煙管を飲みながら怠惰に寝ている老人の姿を朝鮮人のステレオタイプとして使っており、それが朝鮮を象徴するように他の作品でもよく使われている。

⑥この地図は、一九〇〇年前後の列強の韓国の利権侵略図で、鉄道や通信を中心に日本人居留地があることが分かる。一番下が釜山でその少し上が大邱、真ん中のところが京城である。写真は処刑される韓国



人の姿。(韓国教員大学歴史教科『韓国歴史地図』平凡社、二〇〇六年十一月十日)。

⑦ 高崎隆治「高浜虚子の『朝鮮』を解剖する——総督は何を読みたか」(『文学のなかの朝鮮人像』創林社、一九八二年四月二十二日)。

⑧ 権升赫「日本の近代文学に見る朝鮮像」(『日本文学研究』三十二号、大東文化大学日本文学会、一九九二年二月)。

⑨ 拙稿の「語られない韓国——『満韓ところどころ』の連載中止と関連して」(『中央大學國文』五十八号、二〇一五年三月、中央大学国文学会)で漱石の満洲旅行と満鉄との関係について論じた。

⑩ 注⑥の地図のように鉄道というのは植民地支配の象徴ともいえるもので、釜山から新義州までの鉄道建設権を日本がすべて握った。

⑪ 「満韓ところどころ」と「朝鮮」で表れる漱石と虚子の朝鮮に対する視線などに対する比較は今後の課題にする。二人が韓国を訪問した時、実際に起こった出来事やそれに関する記述に關しても以後、詳細に調べ、二人の違いや新しい観点などを探ることにする。

⑫ 『ホトトギス』第十五卷第二号、一九一一年十一月一日。

⑬ 三谷憲正「高濱虚子の小説作法——『朝鮮』をめぐる」(『国文学解釈と鑑賞』二〇〇九年十一月号)。

⑭ 「寫生文と小説」(『国民新聞』一九〇六年十月二十三日)。

⑮ 「穀山詣」(『国民新聞』一九〇七年三月九日(二十四日))。

⑯ 「風流儼法」(『ホトトギス』一九〇七年四月)。

⑰ 「朝鮮」の登場人物が実在した人物である可能性は今のところではまだ見つかっていない。『ホトトギス』や『国民新聞』などに、虚子が朝鮮を訪問した当時に載せられた散文などを分析し、実在人物であるかを明らかにするなどは、今後の課題として残す。今後は登場人物の虚構性だけではなく小説の違う側面からも検討する。

⑱ 一九七三年十一月—一九七五年十一月に発刊された虚子生誕一〇〇周年記念全集『定本高浜虚子全集』(全一五卷、別卷一卷、毎日新聞社)ではなぜか『朝鮮』が削除されるが、韓国では二〇〇九年と二〇一五年、二回にわたって翻訳、出版された。

* 討論要旨

谷川恵一氏は、『ホトトギス』の消息欄が事実関係を確認する資料として不適切である、と指摘した。また、小説と寫生文の違いを虚構の人物が登場するか否かで決定することについて疑問を呈した。発表者は、事実関係をさらに綿密に調査したうえで研究を進めたい、と回答した。

谷川氏はまた、虚子が朝鮮の実情を書けなかった理由について、寫生文という方法上の限界だけでなく、検閲の可能性を考慮に入れるべきである、と指摘した。それに対して発表者は、これまでの研究成果をもとに、当時の知識人が朝鮮を見る目を持たなかったということを出発点として、その理由を探ることが発表の目的であったため、今回のような結論に至ったと説明した。

中川成美氏は、結果的に朝鮮の実像が言説化されない仕組みを明らかにするためには、同時代の朝鮮側の史料と照合するという方法が有効である、と指摘した。また、残されたテキストから虚子の体験をできるかぎり忠実に再現する作業を通して、現実と書かれたものとの齟齬がいっそう明瞭になっていくであろう、と助言した。